

大野本公 曲書

【休館時間】

頂

千田山田曾 世香田村題 千美山田題 結露村村 頂

香三田菜 粟 高商 〇利本龍吉

千田山田 千田山田 千田山田 千田山田 千田山田

香三田菜 粟 高商 〇利本龍吉

藤の会

秋のおさらい会

千田山田 千田山田 〇利本龍吉

香三田菜 〇利本龍吉

千田山田 〇利本龍吉

とき

令和 8 年 10 月 4 日 (日)

13 時開演

ところ

札幌ガーデンパレス 2階 丹頂

(札幌市中央区北 1 条西 6 丁目 /011-261-5311)

1

虹

作曲 松本雅夫

虹 村林満詠 / 渡辺由美子 / 股村和香世 / 曾根佐和子 /
中川真弓 / 工藤尚子

乱 米田哲子 / 折笠由美江 / 荒内朋子 / 富岡悦子 /
佐藤かほり / 高荷 操 / 柴田三香

2

荒城の月

作曲 滝廉太郎 / 作詞 土井晩翠 / 編曲 中塩幸祐

1こと 渡邊俊子 / 米田哲子

2こと 柴田三香

う た 荒内舞結子

3

秋の言の葉

作曲 西山検校

本 手 岩谷禊子

替 手 米田哲子

4

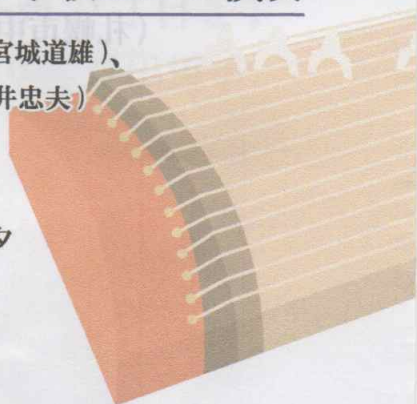
伝統文化にふれる・子どもお箏教室生の演奏

さくら（日本古謡）、おこと（作曲 宮城道雄）、
糸車（作曲 野村正峰）、花筏（作曲 沢井忠夫）

年少組 熊田英莉沙 / 小辻理桜

年長組 伊藤 松 / 柴田祢音 / 八巻仁夕

助 演 柴田三香 / 佐藤かほり



【 休憩 15 分 】

—— 藤の会会員貢献者 山川眞智子さん追悼 ——

5

都 踊

作曲 宮城道雄

低 音 阿部玲子 / 米田哲子

高 音 荒内朋子

三 絃 村林満詠



6

八段の調

作曲 八橋検校

三絃本手 村林満詠 / 渡辺由美子 / 荒内朋子 / 富岡悦子

三絃本手 米田哲子 / 岩谷禰子 / 股村和香世 / 曾根佐和子 /
鏡 克紀 / 高荷 操 / 工藤尚子

7

石狩川 “春”

作曲 唯是震一

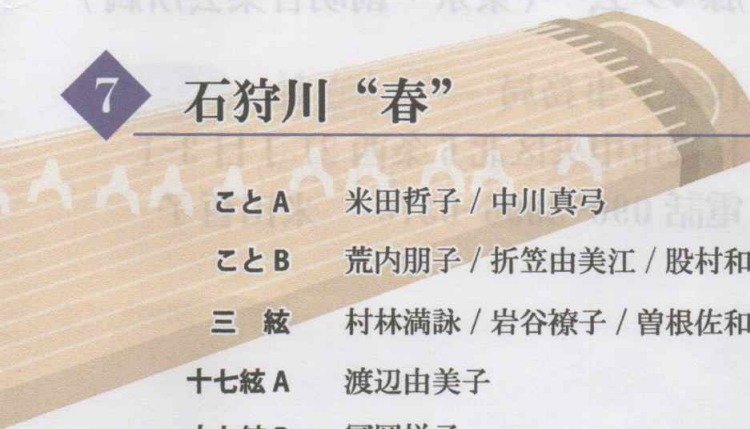
こと A 米田哲子 / 中川真弓

こと B 荒内朋子 / 折笠由美江 / 股村和香世 / 佐藤かほり

三 絃 村林満詠 / 岩谷禰子 / 曾根佐和子 / 鏡 克紀

十七絃 A 渡辺由美子

十七絃 B 富岡悦子



楽曲解説 / 歌詞

1

虹

作曲 松本雅夫

「作曲の動機は、五十才代から研究を続けてきた法隆寺西院伽藍の配置計画図を平成五年に完成することが出来、その過程で、千二百年前の歴史の『虹』が見えて来たので、何とかふさわしい曲を書いてみたいと思っていました。

これと平行して、『乱』のリズム分析も始めていたのですが、その絶妙さには圧倒される毎日だったので、そのリズム分析を基にして作曲してみました」（作曲者）

2

荒城の月

作曲 滝廉太郎 / 作詞 土井晩翠 / 編曲 中塩幸祐

哀調をおびたメロディと歌詞が特徴。七五調の歌詞（今様形式）と西洋音楽のメロディが融合した楽曲。特に、日本で作曲された初めての西洋音楽の歌曲とされ、日本の歴史的に重要な曲である。

へ 春 高楼の 花の宴 めぐる盃 影さして
千代の松ヶ枝 わけ出でし 昔の光 今いづこ
秋 陣営の 霜の色 鳴きゆく雁の 数見せて
植うる剣に 照りそいし 昔の光 今いづこ
今 荒城の 夜半の月 変わらぬ光 誰がためぞ
垣に残るは ただかつら 松にうたうは ただ嵐
天上 影は 変らねど 栄枯は移る 世のすがた
写さんとてか 今もなお ああ荒城の 夜半の月

秋の虫の声、桐の一葉、野辺の露、遠く聞こえる砧、澄んだ月などを通して、秋の深まりと古歌の世界を表現した箏曲。

へ〔前弾〕散り初むる 桐の一葉に自から 袂涼しく朝夕は
野辺の千草に置く露の 露の情を身に知るや 誰松虫の
音に立てて いとど優しき鈴虫の 声にひかれて武士の
歩ます駒のくつわ虫 哀れは同じ片里の いぶせき賤が
伏家にも つづれさせてふ蟋蟀 機織る虫の声々に
合わす拍子の遠砧

〔手事〕面白や 暮行くままの大空に 隈なき月の影清き
今宵ぞ秋の最中とは 昔人の言の葉を 今に伝えて敷島の
道の葉りと残しける

さくら（日本古謡）

へ さくら さくら 野山も里も 見わたす限り
かすみか雲か 朝日ににほふ
さくら さくら 花ざかり

おこと（作曲 宮城道雄）

へ お箏を弾きましょ コロリンシャン
爪を三本 しっかりはめて 歌も歌いましょう
大きな声で チテツテ チテツテ トッテンシャン

糸車（作曲 野村正峰）

初心者がなじみやすい箏の二重奏曲。

花筏（作曲 沢井忠夫）

清流に乗った花の美しさとその動きを色々な角度から楽しんで表現した作品。

5

都 踊

作曲 宮城道雄

都踊とは、京都祇園の舞妓や芸妓によって演じられる組み踊りのこと。その艶麗で華やかな気分を表現した歌人大和田の詞に、手事物形式の曲をつけた作品。後に改作されて、現行の歌・三絃・箏本手・箏替手・尺八編成となった。

大井川 瀬々の紅葉か 亀山の 岩根の波か
集まれば 散りて乱れて 乱るれば
また連なりて 春風に 舞うは蝶 夜嵐に散る花
〔手事〕
花なれば まだ蕾なる 乙女子の いづれ色香の
姉か妹か 花か紅葉か

6

八段の調

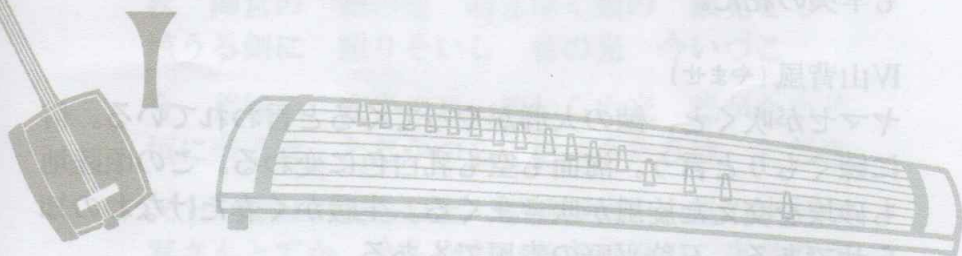
作曲 八橋検校

寛文年間に八橋検校によって作曲された傑作で、『六段の調べ』と並び非常に有名な曲。

当時は、生田流・山田流といった流派の区別はなく、箏曲を学ぶ人は本曲を練習した。

一段を一楽章として八楽章で一曲となるので八段と称せられる。近世箏曲の基礎を築いた作品の一つであり、現代の箏曲においても重要な役割を果たしている。

今回は、三絃のみの演奏を試みた。



合奏組曲。

Ⅰ 雪解水（ゆきげみず）

四月の声とともに雪が解けはじめる。野にも山にも街にも春の陽を浴びて、雪解水が流れる。石狩川の水も、支流の雪解水を豊かに受け入れて、水流を増す。しかし、大河は焦らず悠然として大海へ流れをそそぐ。

Ⅱ 古潭（こたん）

コタンはアイヌ語で山川や海辺に近い村里を意味する。石狩川の流域には、神居古潭と呼ばれているところが幾箇所もある。アイヌ語では神の住む里のことで、昔丸木舟で上下していたアイヌ達が、ここを難所として恐れ、通る時はイナウという御幣を川に投じて安全を祈ったという。アイヌの旋律を中心に、神秘的溪谷の情緒が描かれている。

Ⅲ 辛夷（こぶし）

長い間雪に覆われた山の傾斜面も、春の訪れと共に雪崩がはじまる。まだ緑のない彼処此处に遅しい、しかし、あまり太くない黒い幹を見せているのが辛夷である。やがて蕾が開くと、両手の掌を広げたような真っ白な花が、黒い幹と対照的に人目を魅く。芳香を漂わせて咲くこの花は、気品高く、また可憐でもある。北海道の山野に最初に春を告げて呉れるのも辛夷の花だ。

Ⅳ 山背風（やませ）

ヤマセが吹くと、鯨の大群がやってくると言われている。俗に鯨ぐもりと言う。海面も空も乳白色に変わる。この頃陸地も砂埃を交えた旋風が吹きまくる。生暖かく春たけなわの知らせである。石狩平野の春風でもある。

【主 催】 藤の会 （東京・創明音楽会所属）

代表 / 事務局

札幌市中央区北 6 条西 21 丁目 3-1

電話 090-3396-0370 米田哲子